The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 〈女ことば/男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説 : 国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から |
| Author(s) | 佐竹, 久仁子 |
| Citation | 阪大日本語研究. 2005, 17, p. 111-137 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/4070 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 〈女ことば／男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説
## ― 国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から

# The discourse of post-WW II newspapers involving "woman/man language" norm： From *Database of Newspaper Articles Related to Language* of the National Institute for Japanese Language

佐竹 久仁子
SATAKE Kuniko

【キーワード】ジェンダー規範、新聞記事、言説、ことばづかい、規範違反

【要旨】

国立国語研究所「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を検索に利用して、〈女ことば／男ことば〉規範に関する戦後の新聞記事の言説を分析した。この規範に関する新聞の言説内容の中心は、女のことばの男性化という〈変化〉の指摘と、女の〈男ことば〉使用という規範違反に対する非難であった。また、規範を提示する言説もおこなわれ、戦後の新聞では〈女ことば／男ことば〉規範を維持・強化する言説がおこなわれてきたことがわかった。近年、規範を批判する言説があらわれたことも指摘できる。

## 1．はじめに

人があらゆる場面で言語行為をおこなう必要があることを考えれば、言語に関するジェンダー規範はジェンダー規範のなかでもとくに重要な位置を占めるものであるといえる。これは、女あるいは男はいつどこでだれにどのように話すべきか／話すべきでないかという規範であるが、日本語社会において特徴的なのは、〈女ことば／男ことば〉ということばづかいについての規範 ―― 〈女ことば／男ことば〉規範 ―― が存在することである。一般にジェンダー規範は、男を標準とし女を周縁化することによって、女により抑圧的にはたらくが、〈女ことば／男ことば〉規範も同様である。「女ことば／男ことば」をめぐる言説が多く女の言語使用をめぐって展開されるのもそのためである。

現在も〈女ことば／男ことば〉規範は規範としての力をもっている。人は多かれ少なかれこの規範を参照して言語使用をおこない、他の言語使用を評価している。規範が規範であるためには、主流の言説であること、そして、常に規範違反をとがめ制裁する言説がお

こなわれることが必要である。

本稿では、戦後の新聞において、〈女ことば／男ことば〉規範をめぐってどのような言説が展開されてきたかを検証する。そして、この規範を維持するためにどのような言説がおこなわれてきたのか、この規範の内容とはどのようなものなのか、また、そこに変化はあったのか、といったことを明らかにし、日本語の〈女ことば／男ことば〉規範の性質と意味にせまりたい。新聞は権威ある主流のメディアであることから、そこで流通する言説も、社会の主流の言説としての力をおびやすい。したがって、新聞の言説を分析することによって、その社会の一般的な傾向を知ることができると考えられる。

## 2．データについて

### 2．1．データの概要

考察のためのデータを収集するにあたっては、国立国語研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」（以下では「国研DB」と仮称）を検索に利用した。

「国研DB」は、国立国語研究所が1949年以来収集してきた言語生活にかかわる新聞記事について見出しなどの情報をデータベース化したものである[1]。ここには「男言葉・女言葉」というキーワードのつけられた記事があるが、その数は、1949年から1999年では全116667件中434件と決して多くはない。これは、ひとつには、このキーワードが原則的に「女言葉／男言葉／女性語／男性語／女性言葉／男性言葉／女性用語／男性用語」といった語を見出しや本文中に含む記事に付与されているためだと思われる。〈女ことば／男ことば〉規範にかかわる女や男のことばづかい、話しかたをめぐる記事は、「言葉遣い」など他のキーワードの項にも採録されている。

本稿では、「男言葉・女言葉」をキーワードとする記事434件以外に、「言葉遣い」「敬語」「呼称」「流行語」「音声・音韻」「話す・聞く」をキーワードとする記事のうち女／男のことばに関する記事として確認できた221件も加えて、合計655件の記事を考察のためのデータとして用いた。データの約7割が朝日・読売・毎日・産経の全国紙4紙のものである[2]。今回のデータからは各紙の特徴として目立った差異を抽出することはできず、データは日本の新聞一般におこなわれた言説としてあつかうことができると思われる。

データの概要は次ページの表1のとおりである。

### 2．2．記事内容の概要

表1　記事の件数

| | |
|---|---|
| 50年代*1 | 69件(投書類13、依頼30、内部26)*2 |
| 60年代 | 110件(投書類21、依頼43、内部46) |
| 70年代 | 138件(投書類42、依頼43、内部53) |
| 80年代 | 224件(投書類88、依頼72、内部64) |
| 90年代 | 114件(投書類35、依頼22、内部57) |
| 計 | 655件(投書類199、依頼210、内部246) |

＊1　50年代には、1949年も含む。以下でも同様。
＊2　「投書類」には、読者の質問に専門家が回答するものも含む。「依頼」は社外の執筆者による署名のある記事、「内部」は記者によって編集・執筆された記事である。なお、以下で記事を引用する際、執筆者名を記したものは「依頼」記事である。

表2　言及対象の性別　(数字は記事の件数)

| 女のことば | 男のことば | 両性のことば | その他* | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 50年代 | 55 | 8 | 5 | 1 | 69 |
| 60年代 | 86 | 5 | 7 | 12 | 110 |
| 70年代 | 99 | 11 | 18 | 10 | 138 |
| 80年代 | 182 | 3 | 27 | 12 | 224 |
| 90年代 | 78 | 2 | 20 | 13 | 114 |
| 計 | 501 | 29 | 77 | 48 | 655 |
| | 607 | | | | |

＊その他：語誌(女房詞など)・著書紹介・性差別語などで、すべてキーワード「男言葉・女言葉」の記事。

まず、「国研DB」の記事の内容をどちらの性のことばづかい・話しかたについてあつかったものであるかという点から分類すると、その件数は表2のようになる。

記事の大半(76.5%)は女のことばづかいや話しかたについてのものである。これは、〈女ことば／男ことば〉規範の主眼が女の言語使用に対する制限であることからすれば、当然の結果だといえる。

本稿では、表2の「その他」を除く記事607件を対象に、そこにみられる〈女ことば／男ことば〉規範にかかわる言説内容の特徴を検討していく。

とりあげた記事にみられる言説内容としては、以下のような種類のものがあった。記事は、これらの言説内容をひとつあるいは複数含んでいる。

・女／男のことばづかい・話しかたの〈変化〉を指摘する
・女／男のことばづかい・話しかたをとりあげて非難する

・非難されることのある女／男のことばづかい・話しかたを許容する
・ことばづかい・話しかたの性差やその特徴を指摘し解説する
・女／男のことばづかい・話しかたの規範を提示する
・〈女ことば／男ことば〉規範を批判する

以下では、戦後の新聞記事に展開されている〈女ことば／男ことば〉規範にかかわる言説について、「各時期におこなわれている最近の〈変化〉の指摘(3.)」「その〈変化〉に対する評価(4.)」「女／男のことばづかいに対する非難(5.)」「〈女ことば／男ことば〉規範の提示(6.)」「〈女ことば／男ことば〉規範に対する批判(7.)」の各側面から分析し考察する。

## 3．〈変化〉の指摘

「最近、女／男のことばがかわった」と〈変化〉を指摘するものは、607件中264件ある[3)]。表3は、年代別・言及される性別の内訳である。

表3　〈変化〉を指摘する記事　（数字は記事の件数）

| | 女のことば | 男のことば | 両性のことば | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 50年代 | 32 | 0 | 3 | 35 |
| 60年代 | 26 | 1 | 3 | 30 |
| 70年代 | 36 | 2 | 8 | 46 |
| 80年代 | 95 | 0 | 10 | 105 |
| 90年代 | 28 | 0 | 10 | 48 |
| 計 | 227 | 3 | 34 | 264 |

女のことばについて述べる記事227件中164件は、「最近、女のことばづかいが男性化・中性化した／乱暴になった」という内容である。なかでも、小中高生を含む若い女性についての指摘が目立つ(142件)。男のことばについての記事(3件)は「ことばの女性化」、また、女と男の両方のことばづかいについての記事の多く（34件中30件）は「女のことばの男性化と男のことばの女性化」という両性のことばづかいの接近が指摘され、それが「セックスレス」「中性化」「無性化」「ユニセックス化」「まじりあい」などと名づけられて語られている。つまり、たとえば次のように、この50年間、くりかえし、「女のことばの男性化」や「両性のことばの接近」が語られてきているわけである。

・男言葉と女言葉の区別も、戦後はうんとせばめられ、男のような言葉づかいをする女の子が増えて来たが(略)(1951.8.14　内部　毎日)
・従来日本語の特徴の一つであった女性語の影がうすくなって来た。(中略)男性語と女性語とがだんだん接近して来て中性的なものが出来かかっている状態は、日本語を外国語として取扱う者にとっては非常にありがたい傾向である。(1963.9.6　築田銓次　朝日)
・近ごろの若い人たちの間で、姿かっこうと同様に、ことばの中性化が進んでいる。(1976.3.24　内部　サンケイ)
・よく言われることですが、男女の服装やヘアスタイルが混然としてきたように、ことばにもそういう傾向が現れています。(1983.6.10　投書　朝日)
・そして今。(中略)男言葉、女言葉は、性別を超えて交錯し始めている。(1993.11.1　内部　読売)

こうした〈変化〉の要因や背景として「男女平等、男女同権の社会」があげられるのも各年代に共通している。すなわち、「男女平等、男女同権の社会ということで、女のことばが男性化した／両性のことばが接近した」という言説パターンは、50年間かわらず存在し続けていることになる。もちろん、言及される〈変化〉の要因や背景には、各年代に特徴的なものもある。たとえば、50年代・60年代はこれに「新憲法」「戦後の自由」「民主主義」が加わり、さらに「男女共学の影響」が強調される。70年代以降は「男女共学の影響」説はほとんど姿を消す。かわって、70年代は「ウーマンリブ」や「国際婦人年(75年)」など女性解放運動についての言及があらわれる。80年代・90年代は「男女雇用機会均等法による女性の社会進出」「情報化社会」が背景説明のキーワードとなっている。メディアの影響についても述べられることが多い。50年代・60年代ではラジオ・映画、60年代以降はテレビがとりあげられ、とくに70年代以降はテレビについての言及が増える。また、70年代に劇画・フォーク、80年代に若者雑誌・マンガの影響の指摘があらわれる。

なお、ことばづかいの中性化と連動するものとして、「女の声の低音化と男の声の高音化」の指摘が80年代(4件)・90年代(3件)にみられる。

〈変化〉についての言及は、他に、話しかたやイントネーションについてのものもある。これらは、先の「女のことばの男性化」「両性のことばの接近」とは異なり、どの年代でも同じ内容の指摘がおこなわれるというものではない。

50年代だけにみられたのが、女の発言力についてのものである。「近ごろの若いご婦人は、人中に出ても、そんなにはにかんでばかりはいず、テキパキと応待(ママ)する人が多くなった

(1952.3.20　田中巖　東京)」、「近ごろ婦人、とりわけ若い女性の人前での発言が、見ちがえるほどしっかりして来た（1953.7.21　内部　朝日)」、「さまざまの集会から投書にいたるまで、あらゆる領域で、婦人の発言力は一年ごとに高まっているようで(1955.12.28　亀井勝一郎　朝日)」、「十年前の日本婦人は、少なくとも社会的には“ものいわぬ人”だった。社会的に発言するのは“専門家”の婦人運動者や評論家でしかなかった。今はどんな家庭の主婦でも職場の若い女性でも、あらゆる機会にどんどん意見を発表する。(1956.4.10　内部　朝日)」と、女が発言する力をもつようになったことを指摘する記事がある。今回のデータでは、60年代にはもはやこのような言説はみられなかった。50年代なかばごろまでは、敗戦による社会の変化が強く意識されていたことによるのだろう。また、記事の収集者も同様の意識をもっていて、この種の記事に目がとまったとも考えられる。

イントネーションについての指摘は70年代（79年）に2件、80年代に13件、90年代に11件みられる。いずれも若い女性のことばについてで、79年から90年代なかばまでは、「語尾上げ」が、90年代なかばからはそれにかわって「半疑問イントネーション」がとりあげられている。これらは「聞き苦しい」として非難されていることが多い。なぜ聞き苦しいとされるかという理由をつきつめれば、結局〈女らしさ〉の欠如にたどりつくだろう。〈女らしさ〉の重要な要素である「美しさ」や「人に不快感を与えないという配慮」が欠如しているということである。

### 3．1．女のことばの「男性化」の具体例から

ことばづかいの〈変化〉の指摘は、とくに女のことばの「男性化」についてのものが多いことを前節でみた。では、「男性化」したことばづかいとして具体的にどのような言語形式があげられているのだろうか。次ページの表4は、記事のなかで「最近、若い女性がつかうようになった男のようなことばづかい」という意味で例示されている形式のうち、文末形式と呼称、その他特徴的な語彙・語法についてまとめたものである。ただし、首都圏以外の地域のことばについて述べられているものは除いた。また、投書は関東地方の読者のものを対象とした。

表から、文末形式「～だ」類(「だわ」を除く)、「スルよ」、「シよう」、命令形、自称詞「ぼく」や対称詞「おまえ」、「呼びすて」などが50年代あるいは60年代から90年代まで共通してあらわれていることが指摘できる。これらがこの50年間ずっと、電車のなかや街角で耳にしたり、あるいは、わが子が使用するのに気づいたりして驚いた最近の〈変化〉として言及されつづけてきたことは興味深い。

ここでは、若い女性の最近のことばの〈変化〉が指摘されることの意味を、文末形式

（「～だ」類・「スルよ」）（3.1.1.）、自称詞（「ぼく」の使用）（3.1.2.）、他称詞・対称詞（「クン呼び」と「呼びすて」の使用）（3.1.3.）についての指摘から検討してみよう。

表4　「男性化」したことばづかいの例

| | |
|---|---|
| 50年代 | ≪文末形式≫～だ、～だろ、～だぜ、～だい　≪呼称≫ぼく、きみ、クン呼び　≪その他≫おい、オッス |
| 60年代 | ≪文末形式≫～だ、～だな、～だね、～だろ、～スルよ、～か、～かい、～かよ、～シなよ、～シようよ、～シた、～ぞ、命令形　≪呼称≫ぼく、きみ、おまえ、クン呼び、呼びすて　≪その他≫オイ、腹 |
| 70年代 | ≪文末形式≫～だ、～だな、～だよ、～スルよ、～かな、～シよう、～シようか、～シた(＋よ)、命令形(＋よ)　≪呼称≫ぼく、おれ、きみ、おまえ、呼びすて　≪その他≫オイ、腹、やばい、せこい、ださい |
| 80年代 | ≪文末形式≫～だ、～だよ、～だろ、～スルよ、～か、～かよ、～ぞ、～ぜ、～な、～なあ、～スルなよ(＋な)、～シよう、命令形(＋よ)　≪呼称≫ぼく、おれ、おまえ、てめえ、あいつ、こいつ、呼びすて　≪その他≫～シちまえ、～じゃねえよ、うるせえな、オイ、コノヤロー、バカヤロー、やばい、すげえ、いてえ、きたねえ、うるせえな、ふざけんなよ、よせやい |
| 90年代 | ≪文末形式≫～だ、～だな、～だよ、～だい、～スルよ、～か、～かな、～シよう、～スルな(＋よ)、命令形(＋よ)　≪呼称≫ぼく、おれ、おまえ、てめえ、あいつ、呼びすて　≪その他≫～じゃねえよ、～シやがる、オイ、バーケヤロー、やばい、やべえ、だせえ、ざけんなよ |

### 3．1．1．「～だ」類・「スルよ」

文末形式についていえば、70年代末、80年代・90年代にはこうした〈男ことば〉形式の使用を最近の〈変化〉とするのではなく、もはやふつうのこととみる記事もある。たとえば、「「女性ことば」もほとんど消え、もう男子と変わらない言葉が女子の口から出てくる(1979.12.10　内部　日経)」、「男言葉でしゃべる女の子が増えたのは、いつごろからだったろう(1986.1.28　内部　東京)」、「NHKの最新の調査によると、全国の中・高校生の半数以上が男言葉で会話中だ(1987.3.30　内部　毎日)」、「家の中にローティーン娘がいると、いわゆる少女らしい言葉づかいは消滅したことがわかる(1990.7.24　鈴木由美子　朝日)」、「女性の言葉が荒っぽくなったといわれて久しい(1992.10.21　内部　朝日)」といったように、〈女ことば〉の消滅や少女の〈男ことば〉使用の一般化を指摘したり、それがかなり以前からのものであることを述べたりするものである。この種の内容の記事は、70年代には1件(79年)だが、80年代には17件、90年代には10件みられる。それと平行して、80年代・90年代には「最近、若い女性がつかうようになった男のようなことばづかい」として、

「〜じゃねえよ」「すげえ」「やばい」「バカヤロー」「ふざけんなよ」といった融合形や俗語、罵倒語が多く例示されるようになる。

「最近の〈変化〉」として指摘される女性のことばの「男性化」の内容は、70年代末を境に異なりをみせるといえる。すなわち、50年代から70年代には文末形式の「〜だ」類・「スルよ」に代表されるような「標準的な〈男ことば〉」の使用がもっぱらあげられていたのが、80年代・90年代には「乱暴な〈男ことば〉」の使用へと重点が移るのである。これには首都圏の女のことばの変化という現実が影響しているとみていいだろう。

尾崎（1999）は、首都圏の調査にもとづいて、女性専用形式とされてきた文末形式「だわ」「わ」「〈だ〉の省略形」は現在急速に衰退に向かっているとし、「「雨よ」「雨だわよ」と言わずに「雨だよ」と言う、「降るわよ」と言わずに「降るよ」と言うことは、現代の二〇代以下の若者にとってはごく当たり前の時代になってきている」と述べる。そして、これらの形式は「昭和三〇年代が普及のピークと考えられる。明治二〇年頃から約七〇年の時間をかけて普及の階段を上ってきた」と推測している。尾崎にしたがえば、80年代・90年代の記事にみられる若い女性の「〜だ」類・「スルよ」の使用はふつうのことであるとの指摘は、実態に即したものといえる。

では、「だわ」「わ」「〈だ〉の省略形」の普及のピーク時といってよい50年代・60年代でも、また、かなり衰退のすすんだ80年代・90年代でも「〜だ」類、「スルよ」の使用を新しい変化としてとらえる言説があるのはどういうことだろうか。これは、「〜だ」類・「スルよ」は〈男ことば〉であり、〈女ことば〉としては「だわ」「わ」「〈だ〉の省略形」を用いるとする〈女ことば／男ことば〉規範と現実の同一視によるところが大きいと考えられる。すなわち、規範からの逸脱を〈変化〉ととらえたものだといえよう。

特定の言語形式を〈女ことば／男ことば〉として性別化する文法規則は、すでに戦前に成立している。鷲（1999）は、昭和初期の口語文法書の調査から、性別化された言語形式がこの時期に文法として記述されるようになった過程を示している。三尾（1942）は、鷲も指摘するとおり、そのなかでもっとも体系的な記述であり、ここに〈女ことば／男ことば〉規範の文法化はほぼ完成していたとみることができるだろう。標準語の成立期は1900年前後とされるが[4]、標準語の基盤となった東京の中流階級のことば(「山の手ことば」)は、小説や雑誌、教科書などの書きことばメディアの会話文や、のちにはラジオや映画などの音声メディアをとおして、インフォーマルな話しことばの標準モデルとして流布されていった。そして、「山の手ことば」の特徴である性別化された言語形式は、1940年代には文法という学問的言説のなかに確固とした地位をしめたわけである。言語形式の性差が「女らしさ／男らしさ」と関係づけて文法的に説明されることで、〈女ことば／男ことば〉規範

はより強固になったといえる。

敗戦によって、日本の政治や社会の制度は大きく変わったが、〈女ことば／男ことば〉規範については、戦前と戦後の断絶はみられないといってよい。戦後も戦前の学問的言説がかわらずひきつがれたことは、多くの日本語概説書で必ずといってよいほど三尾の整理したものとかわらない〈女ことば／男ことば〉の諸形式に触れられることからも明らかである。また、戦後の教育の拡充やメディアの発達、とくにテレビの普及によって、〈女ことば／男ことば〉規範にしたがったことばづかいはインフォーマルな「標準日本語」の話しことばとして戦前以上に広範に浸透していった。そして、「日本語は性差の大きい言語で〈女ことば〉と〈男ことば〉がある」という言説が繰り返されて常識化し、現実には規範から逸脱した言語使用が多くおこなわれているにもかかわらず、それらは日本語の正統ではないものとして例外視・無視されることになるのである[5]。こうしたことが、若い女性の「～だ」類・「スルよ」の使用のばあいのように実態とはかかわらず、常に「最近の〈変化〉」として指摘されるという現象を生んでいると考えられる。

### 3．1．2．「ぼく」の使用

自称詞「ぼく」の使用も「～だ」類・「スルよ」同様50年間指摘されつづけている「最近の〈変化〉」である。

- 「おい。キミい。ボクはあしたハイクるんだぜ。どうだい、すばらしいだろ」(筆者注：「若い女性のこのごろの話しかた」の例示)(1954.2.12　内部　朝日)
- 近ごろの若い女性が交わす言葉の中には、女性の品位を引きさげる耳ざわりな言葉がいろいろあるようです。“ぼく”“あのよう”“そうだね”“いかれちゃった”など。(1962.11.6　投書　毎日)
- 二、三年前から女の子がキミとボクを自然に使いはじめて、かなり普及しているらしい。(1978.12.1　内部　朝日)
- 最近、関東地方の女子学生で「ボク」を使う者が多くなっている。(1980.5.19　井出祥子　読売)
- そして今。自分を「ぼく」「おれ」と言う女子中学生。「そうなのよね」「行かないのかしら」など、ソフトにおしゃべりする男子大学生。男言葉、女言葉は、性別を超えて交錯し始めている。(1993.11.1　内部　読売)

じつは、若い女性の「ぼく」使用は戦前にも指摘されており、保科（1936）は女学生の

あいだで男子の用語である「きみ」「ぼく」を用いるものがあるとしてこれをいましめている[6]。「〜だ」類・「スルよ」のばあい、おとなの女の使用についても言及されることがあるが、「ぼく」使用の指摘は常に小・中・高校生を中心とする若い女性についてで、おとなの使用を指摘するものはない。どの時代にも「ぼく」と自称する女子生徒・学生が存在し、また、彼女たちもおとなになると「ぼく」を使用しないというのが実態だろう。小林(1997)は首都圏の職場の呼称の実態を分析しているが、そこでは女の自称は「わたし」「あたし」「わたくし」の3種で、「ぼく」使用は皆無である。

こうしたことから考えると、女子生徒・学生の用いる「ぼく」(70年代以降は「おれ」も指摘される)は、規範への反発を秘めた「仲間ことば」の一種にとどまっており、いまだ言語変化に結びつくものではないといえる。「ぼく＝男の自称詞」という規範の力は強く、おとなになって日常的に「ぼく」をつかいつづけることには大きなデメリット(たとえば、注目されたくなくとも注目される、常に説明を求められる、常識にあえて反抗する者・男に対する青くさい対抗意識をもつ者というレッテルをはられる、など)がともなう。したがって、おとなの女の「ぼく」使用がおこなわれないのであろうが、そのことがまた「ぼく＝男の自称詞」という規範を強化し、女子生徒・学生たちの「ぼく」使用を常に最近の現象としてとらえさせるのだと考えられる。

### 3．1．3．「クン呼び」から「呼びすて」へ

若い女性の最近のことばづかいとして「クン呼び」や「呼びすて」を指摘する記事は、50年代に6件(「クン呼び」)、60年代に4件(「クン呼び」3件、「呼びすて」1件)、70年代に7件(「呼びすて」)、80年代に11件(「呼びすて」)、90年代に2件(「呼びすて」)ある。「クン呼び」を新しい〈変化〉とする指摘は50年代・60年代だけで、70年代以降みられなくなる。これは、戦後、男子に対する女子の「クン呼び」が学校を中心に急速に広まっていったことと対応している。70年代になると、「現在では、小学校から大学まで女性が同級生の男性を「くん」呼びするのが例である。(1972.12.25　投書　朝日)」と、女の「クン」使用がもはやあたりまえとなっているとの指摘がなされている。

「これからの敬語」(建議1952)に「「くん(君)」は男子学生の用語である」とあるが、「クン＝男ことば」という規範が50年代・60年代当時まだ力をもっていたことは、50年代・60年代の「クン呼び」に関する記事が1件をのぞきつぎのように女の「クン」使用を非難する言説であることからもわかる[7]。

・君(クン)とはいままでの習慣では自分と同輩か、それ以下の相手に対する呼称で、

しかも男の専用語であったはずです。(中略)君によって敗戦後の女子全体を批判するわけではないが、小さい一例でも現実の社会とつながりのない悪い言葉を学校で使うのは良いことではありません。男女同権のはき違いを助長するのではないかと恐れるのです。(1955.3.20　投書　讀賣・大阪・朝)

・とくに若い人は敬語の使い方を知らないという。男子学生の用語である「くん」を女子学生が使ったり、目上の人に友だちに対するようなことばを使ったりする。(1969.1.13　投書　読売)

しかし、女子の「クン」使用の一般化とともにこの規範は急速にくずれていったようで、規範違反をとがめるのも、70年代にはつぎのようにあきらめまじりのものとなる。

・お茶の水女子大付属小の大橋富貴子先生（六〇）は、その歌(筆者注：当時流行した「山口さんちのツトム君」)を聴くとやっぱり不愉快になる。(中略)「なぜって、『くん』は男言葉でしょう。それを、あの歌では、女の子に言わせている。(中略)」大橋先生は教師歴三十八年、むろん小学校の現場で、ほとんどの女生徒が男生徒を「くん」呼びしているのは承知のうえだ。(中略) この「くん」呼びの“先駆者”は女の先生、三十年ごろから目立ち始めた、と大橋先生は見ている。大橋先生の切なる願いも空しく、すでに「悪貨（くん）は、良貨（さん）を駆逐している」ようだ。(1976.11.19　内部　読売)

もちろん、中学校長の飯島孝夫が「中学生は、教室での敬語能力の成長するのに反して、生徒仲間での敬語の乱れが始まる時期である。新語、流行語、軽べつ語の流行、敬意衰弱、男生徒に対する女生徒の呼称に「○○君」などの性別混乱が目に余ることもある」(『「ことば」シリーズ１』文化庁 1974)と述べているように、70年代にも非難の声はあるが、結局、学校社会では女子を「サン付け」、男子を「クン付け」で呼ぶことが広くおこなわれるようになる。女の「クン」使用という〈女ことば／男ことば〉規範違反が急速に受けいれられたのは、なによりも「女－サン／男－クン」という呼びわけが一般的なジェンダー規範 ── 性別を明確に表示することを求める ── に合致するからにほかならない[8]。

すなわち、「女－サン／男－クン」は学校での呼称の新たなジェンダー規範となったといえる。そして、70年代以降(ただし、69年に1件ある)、女子の「呼びすて」使用が新たな〈変化〉として指摘されるようになる。これらの記事はすべて、「女－サン／男－クン」という規範、「呼びすて＝〈男ことば〉」という規範に違反するものとして、女子の「呼びすて」使用を非難するものである。この時期以降、女の「クン」使用は〈女ことば／男ことば〉

規範の適用項目からはずされ、「呼びすて」がこれにとってかわったことがわかる。

・私の学生時代は、男子を「君」づけで呼んだことはなく、お互いに「○○さん」と呼び合ったものだ。けれども今ごろの子供たちは、女子が男子を「○○君」と呼ぶのが普通とされている。そのことに驚いていたら、もっと驚くべき事実があった。息子の組では、女子も男子もほとんど呼び捨てなのである。(中略)親しみをこめて呼んでいるつもりなのかも知れないけれど、女子の呼び方としては、いささかひんしゅくを買う。(1976.12.20　投書　毎日)
・小三の娘の学級懇談会で、女の子が男の子を呼び捨てにするという話が出た。私の娘も、男の子のことを話すとき、“クン”をつけたことがない。(中略) 私も男女は平等と主張する一人ですが、女の子は女の子らしくあって欲しい。せめて面と向かって呼ぶときは、“クン”をつけて欲しい。(1981.6.29　投書　読売・朝)
・最近、女子中学生の言葉遣いで気になることがあります。それは、男子生徒を敬称をつけずに呼び捨てにすることです。／私の学生時代を思い返してみても、男子が女子を呼び捨てにすることはあれ、現在のように女子が男子を敬称をつけずに呼び捨てにすることは全くと言っていいほどありませんでした。時代の変化と言えばそれまでですが、私にはどうも乱暴な言い方にしか聞こえず、また、女性としての思いやりが欠如しているような気がしてなりません。(1984.11.6　投書　サンケイ)

## 4.「最近の〈変化〉」に対する評価

### 4．1．肯定的評価

「最近、女／男のことばがかわった」と「最近の〈変化〉」を指摘する記事264件のうち、その〈変化〉を積極的・肯定的に評価する記事は21件、「やむをえないことだ」として許容し消極的に受けいれる記事は8件であった。積極的評価にせよ消極的許容にせよ、評価が否定的ではないものはあわせて29件で、計量的検討に向かないデータの性質を考慮しても、やはりこの種の言説は少ないとみていいだろう。この29件中9件(積極的評価5件、消極的許容4件)が50年代であることは注目される。敗戦後まもない時期であることから、戦前の社会への強い否定意識が〈変化〉を許容し評価することに結びついたのだと思われる。つぎは、なかでももっとも明快な評価である。

・このごろの若い娘たちは、あのシナとコビをふくめて、あわれっぽくよりかかるよう

な女言葉を、しだいに、きわめて自然に使わなくなりつつある。なかには、男言葉に近い言葉を、けっしてふしぜんではなく、女の魅力もけっして損じないで、身につけはじめている人もいる。それは、日本の婦人が、いまでは死んでいる礼儀作法をわきまえなくなったのではなしに、自立心をもった人間として成長しつつあることだと思う。今までの「やさしい女言葉」なるものは、男にすべての力をうばわれてしまったなかで生きていかなければならなかった婦人たちが気よわく、自信なく、せつないほどけんめいにシナとコビをこめて、オドオドと男の顔いろをうかがってきた言葉である。そんな言葉を、女らしい言葉と信じているような礼儀作法は、過去のものにしてしまいたい。あれは奴隷の言葉である。男言葉でも女言葉でもない、しかし男が使っても女が使っても、おなじととのった、あかるい美しさをもったそういう日本人の使う性別にこだわらない人間としての話し言葉が、ほんとうの生きた生活のなかで若い人によって、少しずつ、つくられつつあるようだ。(1953.3.4　古谷綱武　毎日・朝)

ただし、50年代と80年代・90年代をくらべると、評価の文脈に大きなちがいがある。50年代は、戦前と異なる男女平等の社会が到来したことのあかしとしてことばの〈変化〉をとらえ、「欧州語の例から考えてみても」賛成だ、「このへんの感覚は欧米に追いついたものといえよう」と欧米に基準をおいて評価する。また、上の記事でも「女の魅力もけっして損じないで」とあるように、女と男のことばが同じでも「女性特有の美と優しさ」は表現できると、本質的な「女らしさ」があることはけっして否定されない。

しかし、これが80年代・90年代になると、「まだまだ、かつてのような女の子らしさが強要される環境はかなり根強い(1988.10.10　宮川俊彦　毎日)」「「男らしさ」「女らしさ」にこだわる社会や意識が変われば、言葉も変わる(1993.11.1　内部　読売)」と「女らしさ／男らしさ」という概念自体を問題にする言説があらわれる。また、つぎのようにことばの政治性を指摘して論じるものもみられるようになる。

・私自身は、彼女等のことばがさほど不快ではない。むしろ、これからの日本語の行く末を暗示しているのではないかと興味津々である。そして逆に、正しい日本語に固執することの方がいささか危険ではないかとすら考えるのだ。(中略)正しい日本語という価値基準を設定して、そこからはみだすことばを否定してしまうのは、方言を否定して標準語を優位と考える、ことばによる差別化にもつながる考え方ではないかと思う。(1984.8.21　如月小春　毎日)

### 4．2．否定的評価

「最近の〈変化〉」について述べられた記事の過半数(264件中152件、約60%)は、〈変化〉を問題視し否定的に評価するもので、その中心は、各年代を通じて若い女性のことばづかいの「男性化・中性化」に対する憂慮や非難である。

- このごろよく電車の中や、街頭において、若い女性たちが、荒ッポイ男性も顔まけの、乱暴なコトバ、色気のないコトバ、汚ならしいコトバなどを、得々として取り交しているのは、どういう量見でしょう。コトバは生きものです。必然的なる変化は、あって然るべきです。だが、そういう女性たちのコトバづかいは、無茶苦茶な変化であります。(1950.11.30　徳川夢声　讀賣・朝)
- 電車の中や道ばたで、また喫茶店にタムロした女性のことばを聞いてみて、聞くにたえないきたないことばに驚くことがあります。流行語をふんだんに使ったり、若い人独特の隠語とか、最近は大阪弁を会話に入れたりで男の粗暴なことばのようなのをよく耳にします。(1962.8.5　芥子川律治　中日・夕)
- 女性語の美しさを投げ捨て、「女らしさ」を蔑視して、男のまねばかりしていたのでは、けっして解放された女性として男性をしのぐことはできない。(1978.12.7　宮下次男　朝日)
- まるで男の言葉だ。聞いていてすこしも美しくない。むろん男の子がこういったとしても美しくはないが、女の子が言うと、違和感がひどく聞くにたえなくなる。(1981.2.12　加賀乙彦　サンケイ)
- 男性はともかく、女性が「お前」、「てめえ」と叫んでいるのを聞いていると、日本語の美しさが吹っ飛んでしまうと感じずにはいられない。(1993.5.7　廖祥雄　読売)

もっとも多い非難のパターンは、上にあげたような、若い女性から「美しいことば」が失われ「きたないことば」「乱暴・粗暴なことば」がつかわれるようになった、というものである。「女性のやさしさ」「女性としての思いやり」「日本の女性の伝統ある美しさ」といった「女らしさ」の欠如が嘆かれ、「吐き気を催すような」「ゾーッとしてしまう」「心が寒々としてくる」「腹立たしく悲しい」といった感情的な否定がなされることも多い。

「女のことばの男性化」や「両性のことばの中性化」に対する非難を支えているのが、「女らしさ／男らしさ」への信念と「日本語の伝統」という文化ナショナリズムの強調であることは、この50年間かわっていない。

男女平等が建前の社会では、「女らしさ／男らしさ」への信念は、「女と男は本質的に異

なるものであり差異はあるが、平等だ」という「性別二元論」と「異質平等論」のかたちをとって主張される。〈女ことば／男ことば〉規範は、男女平等に反する不公正なものであるという批判にさらされる「危険性」を常にはらんでいる。そこで、これをかわすためにつぎのような性別二元論・異質平等論によったレトリックが駆使されるのである。「男女平等、男女同権」が変化の要因としてあげられることはすでに触れたが、非難の文脈では、これは「男女平等のはきちがえ」として示されることになる。

・男は男らしく、女は女らしくあってのうえでの心の平等さであり、服装にしても男女の差ははっきりしています。言葉はいわば精神に着物をきせたようなものでしょう。（中略）服装とか言葉づかいのうえでのみ男女が近づきあうことは、表面的な軽薄な考え方の男女平等で、真の平等からは遠くそれたものだと思うのです。（1957.10.13　投書　毎日・朝）
・男女平等であり共学であっても、女子にはやはり女子らしい優しさがあり、情操面に優れた特性がある。荒っぽい粗野な言葉の横行が自ら彼女たちから女子の特性を奪っていく。（1975.3.13　投書　産経）
・情報化社会といわれる中で、言葉の変遷にもめまぐるしいものがあるのだろう。しかしそこには、あくまでも女性としての言葉、男性としての言葉の一線があってほしいと思うのは考え過ぎだろうか。男女平等とは、個人の意識の問題であって、女性が男言葉を使うのとは別のような気がする。（1986.9.8　投書　北海道）

また、〈女ことば／男ことば〉の存在を日本語独特の美点であり伝統であるとし、〈女ことば〉を女の本質にもとづく上品・優美なものとして称揚する言説もくりかえし登場する。「女のことばの男性化」や「両性のことばの中性化」はすぐれた国語の伝統美と優美な〈女こしば〉を破壊し、性の本質としてある〈女らしさ／男らしさ〉を失わせるものとしてとらえられる。以下では、「国語の美点」「美しい日本語」「わが国が誇る伝統文化」「日本語独特の優しさ、豊かさ」「女らしい優しい言葉遣い」「女性特有の繊細な言いまわし」といった表現がキーワードとなっている。

・やはり男は男らしく、女は女らしく話したい。せっかくの日本語独特の優しさ、豊かさが失われていくのはさびしい。（1976.3.24　内部　サンケイ）
・男女の平等と、ことばの均一化とは、次元がちがうと私は思う。いかに、社会的には平等であっても、男と女の声の質は画然とちがう。女性の高い、柔かな声に似合った

ことばづかいを考えだした日本人の耳のよさはすばらしい。その、せっかくの国語の美点が、最近、失われていくのを私は味気ないことに思う。(1980.1.17　加賀乙彦　日経)

・元来は日本語ってとても美しい響きのある言葉ではないでしょうか。きちんとした女言葉、男言葉、丁寧語があるのは日本語だけではないでしょうか。(中略)こんな素敵な美しい日本語を、美しいまま次の時代に伝えたいと思うのは私だけなのでしょうか。(1983.7.4　投書　東京)

・欧米では、わが国ほど男言葉、女言葉の違いはないようですが、女らしい優しい言葉遣いは、わが国が誇る一種の伝統文化ともいえましょう。(1988.10.16.　投書　西日本)

〈女ことば／男ことば〉、とくに〈女ことば〉の存在を「国語の伝統美」として称揚する言説は、戦前は専門家によって学問的な裏づけをあたえられていた[9]。しかし、今回データとした戦後の新聞記事には、国語学や言語学の専門家によるこうした露骨な称揚の言説はみられない。これは専門家以外の人々によっておこなわれる「大衆的言説」となっている。ただし、専門家の言説がこうした大衆的言説と無関係なわけではない。専門家は、たとえばつぎのように〈女ことば／男ことば〉の存在や特徴を日本語の実態として自明のものとして提示する言説によって、この大衆的言説を支えている。

・日本語では、女性である限りは使わなければならない女性語と、ある場面では使ってはならない女性語と二通りあります。(1978.4.9　野元菊雄　サンケイ)

・女性語は、普通のことばにくらべ、よそゆきのことばであり、男性語はくだけたことばである。(1980.5.16　井出祥子　読売)

・日本語には女性語が特によく発達している。(1986.7.25　石黒修　産経時事)

・日本語には、女性(男性)しか使えない言葉、女性(男性)だけが使う言葉(「あらっ」など)が実に多い。(1997.9.14　佐々木瑞枝　朝日)

## 5．女／男のことばづかいに対する非難

規範が規範として機能するためには、常に規範からの逸脱をいましめ、違反があったばあいには制裁を加える必要がある。新聞メディアで展開される、女／男のことばづかいを非難する言説実践は、〈女ことば／男ことば〉規範の無視・違反に対するいましめ・制裁の

行為であるといえる。また、逆にいえば、こうした制裁が加えられるということは、〈女ことば／男ことば〉規範が力をもっている、ということも意味する。

女／男のことばづかいへの非難や批判は、4．2．でみたような「最近の〈変化〉」に対するものだけではなく、日常生活のなかでたまたま耳にしたことばや「女／男のことばづかい・話しかたの特徴」とされるものも当然対象となる。〈変化〉以外について批判的にとりあげたものは607件中128件である。〈変化〉についての非難とあわせると、今回データとした記事の半数近くの607件中280件が、女／男のことばを非難・批判したものということになる。表5は、〈変化〉以外についてなされた非難の言説の記事である。

表5　非難の記事（〈変化〉に対するもの以外）　（数字は記事の件数）

| | 女のことば | 男のことば | 両性のことば | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 50年代 | 11 | 6 | 1 | 18 |
| 60年代 | 19 | 2 | 0 | 21 |
| 70年代 | 23 | 5 | 1 | 29 |
| 80年代 | 39 | 1 | 0 | 40 |
| 90年代 | 20 | 0 | 0 | 20 |
| 計 | 112 | 14 | 2 | 128 |

非難や批判は、やはり女のことばについてのものが多い。男のことばについての批判は、14件あるが、そのうち11件がつぎのように男が女（とくに妻）を「オイ」と呼ぶことについてのものである。あわせて「おまえ」や「呼びすて」で呼ぶことも問題にされているものもある。50年代の6件はすべてこの「オイ」批判である。

・男の人は口には民主主義を唱え、進歩的なことを言っていても、家に帰ったらオイコラという調子じゃないですか。(1951.1.1　内部　朝日)（筆者注：座談会での坂西志保の発言）
・わが国では妻を「サン」づけに呼ぶ人はまだきわめて少数、大多数は「オイ」か、呼びすて。また、あなたや君でもなく、「お前」だということです。同格になっていません。「呼び方なんかぐずぐずいうな。お前を愛している。それでいいんだろう」なんていう人がよくあります。でもやはり言葉は内容の表現です。(1953.10.8　田辺繁子　朝日)

70年代には、こうした批判に対する「オイでも通ずる愛情」「オマエと呼ばれたい」「「オイ」と呼んでなぜ悪い」といった反論もみられるが、くりかえされる「主人」論争のよう

な激しさはない。「オイ」には「主人」のばあいのような語の意味自体にひそむ差別性がないからかもしれない。

表6　女のことばを批判する投書

| | |
|---|---|
| 50年代 | 「ことばの美しさ」「服装より言葉」「われわれ女史」 |
| 60年代 | 「ことばは正しく」「女の子らしい言葉を」「お粗末な若い女性のことば」「女性アナに不適当なことば」「地方の女性のことば」「言葉づかいというもの」 |
| 70年代 | 「言葉づかいは美しく」「ていねいな日本語を使おう」「女の子はきれいなことばを」「容姿より言葉遣い」「耳ざわりな女性の「○○君」」「乱暴な言葉使う女高生幻滅！当世女高生ことば」「あきれた女子中学生の言葉」「女の子の言葉遣いがひどい」「男ことば使う娘　『オレ』『オマエ』に心配」「尼僧先生の男性言葉に驚く」「女教師にも敬語の乱れ」「女の先生は「さん」づけで」「女医さんの乱暴な言葉遣い」「ものの言い方知らない母親」「親の態度、子は見抜く　あきれた母親の言葉づかい」 |
| 80年代 | 「もっと日本語を大切に」「大切にしたい美しい日本語」「正しい言葉皆の努力で」「健全な会話を」「女性よ優しい言葉遣い失うまい」「ことばだけは「女性らしく」」「言葉遣いも人格の一部」「困った「変形日本語」の流行」「嘆かわしい女生徒のマナー」「女の子が呼び捨てなんて…」「「キサマ」「オレ」女子中学生」「ごく普通の娘なのに」「驚いた女子高学生の言葉遣い」「空おそろしい女高生の会話」「女の子の言葉遣いに驚いた」「はやり言葉　男言葉にゾッ」「気になる少女の乱暴な言葉遣い」「少女の乱暴な言葉遣いは…　みっともないことよく平気で言える」「女の子の言葉遣いに心配りを」「言いたい放題の女の子に悲しい思い」「乱れ過ぎる生徒の言葉」「マンガの言葉づかい」「乱暴な言葉の女教師反省を」「女の先生が「お前ら」とは」「あ然とした女性教師の言葉遣い」「女の先生だって「お前ら何だ」」「ひどい言葉の母親が増えた」「息子を呼び捨てにする嫁」「気になります　やっぱ、ピーマン」「気になります　連発「あら、ホント」」「女性の会話が騒がしい」 |
| 90年代 | 「嘆かわしい女性の言葉遣い」「汚い言葉使う花嫁姿に幻滅」「妙齢の女性が何という暴言」「再び「乱暴な言葉遣い」つい仲間言葉」「再び「乱暴な言葉遣い」人間性の問題」「敬語は常に話せるように」「いまの若者　男女の「らしさ」失うな」「不快な女子高生言葉」「コギャル語って何が面白いの？」「男言葉にギョッ」「男言葉連発の困る女性教師」「ひどい言葉で子供しかる母親」 |

ここでは、〈変化〉ではみられなかった女のことばに対する批判を中心にみてみたい。まず手がかりとして、女のことばを批判する投書をあげると、表6のようなものがある。

女子中高生をはじめとする若い女性の〈男ことば〉や「乱暴なことば」の使用が非難されるのは、〈変化〉のばあいと同じであるが、それに加えて敬語が正しくつかえないことや流行語の使用が問題にされる。また、若い女性以外に母親や女性教師、女医、女性アナの〈男ことば〉や「乱暴なことば」の使用が非難の対象となっていることがわかる。60年代

の「地方の女性のことば」「ことばづかいというもの」、70年代(71年)の「女の子はきれいなことばを」は、女の方言使用をとりあげたものである。

以下では、「母親・女性教師に対する非難(5.1.)」、「方言使用に対する非難(5.2.)」、投書以外の記事にみられた「ていねいすぎることばづかいへの非難(5.3.)」をとりあげる。

### 5．1．母親・女性教師

投書でも他の記事でも、若い女性に次いで目立つのは、母親や女性教師である。家庭では母親、学校では女性教師がこども、ことに女の子のことばのしつけの責任者とされており、投書でも他の記事でも父親や男性教師の責任については触れられていない。〈女ことば／男ことば〉規範にしたがわない母親や女性教師は、ことばづかいが「乱暴で〈女らしく〉ない」ということだけで非難されるのではない。彼女たちのことばづかいが非難されるのは、それがこどもたちに影響を与え、規範にしたがわないこどもを再生産するおそれがあるからである。

母親は「おかあさんが正しい、きれいなことばを使えば、子どもも正しい、きれいなことばを話す(1964.4.8　内部　朝日)」といましめられ、「いったい日本語はどこへ行くのか。子供に口移しでことばを教える母親の責任は大きい。(1970.4.2.　島田一男　日経)」と責任を強調される。また、〈男ことば〉をつかう女性教師は、「年ごろの女の子が、中学、高校に進んでからの影響も気になる(1987.4.6　投書　毎日)」「女の子が男言葉を使うのはここにも一因があるように思う(1989.4.17　投書　読売)」と、少女の「ことばの乱れ＝〈女ことば／男ことば〉規範違反」の責任の一端を負わされている。

テレビやラジオに登場する女の「アナウンサー・タレント・弁護士・評論家・大学教授」などの〈男ことば〉に対する批判もみられるが、これも同じ理由からである。

### 5．2．方言

50年代・60年代には方言を使用する女を否定的に評価する言説がみられる。「方言矯正教育」がおこなわれていたこの時期、「国研DB」によっても、50年代および60年代前半に、

- ナマリ、方言の直し方　一ヵ月の発言練習と注意で
- まず学童に「口の体操」　汚い河内弁　追放運動始る
- 富山国体と方言　共通語をできるだけ使おう
- 方言なおしにひと役　テープで「声の交換」　品川区大間窪小　秋田のお友だちのため
- 山形で母親が標準語運動　消える粗雑な「方言」

・ズウズウ弁の追放運動　ラジオ・スケッチ

といった類の多数の「方言追放」「標準語運動」の記事を検索できる。〈女ことば／男ことば〉規範が女に課するのは「女の本質」とされる「上品で優美な女らしい」ことばづかいだが、それには「悪いことば」「きたないことば」として追放の対象になるような方言は当然含まれることはない。たとえば、若い女性の方言使用を改善すべきものとして否定的に述べるつぎのような投書がある。

・洋裁か和裁にでも通っているのでしょう、美しい娘さんたちが二、三人歩きながらの話しごえ。“けるべえやってんに、けえんねえんだもんな”“しょうがねえや、ぬれちゃったんだもん”…。Kさんならずとも、お化粧には十分に留意して都会ふうに美しくよそおいながら、ことばは粗野そのもの、この若い女性の会話には、ウンザリしないわけにはいきません。(中略)日本語を美しく上品に使うために、若い女性の方たちにふさわしい“ヘンなことば”とならない方言の生かしかたはないものでしょうか。(中略)ともあれ、若い女性のことばを、美しい余韻のあるものにしてほしいものです。(1961.2.13　投書　読売)

・私の住む人口四万弱、漁港の町でも、近年、若い女の子の服装などが“都市化”して東京とまでいかなくても仙台や盛岡の女の子に比べて決して見劣りはしない。しかし“ことば”は「オレも、そうなんだ」「オレのうちへ来ないか」といったふうである。全国に、まだ、こういう「オレ」という“ことば”を使っているところがあったなら、私の町同様、若い女の子のきたないコトバはやめてほしいものである。(1971.8.14　投書　産経)

「オレ」についての投書は71年のものであるが、筆者は岩手県の男性である。「オレ」は地域でずっとつかわれてきた両性共通の自称詞であるにもかかわらず、女の子の「きたないことば」として否定されるところに、「オレ＝〈男ことば〉」という規範の強さをみることができる。

また、つぎは、1954年6月4日の警察法案をめぐって衆議院本会議で乱闘がおきたときの大石ヨシエ議員の発言に対する非難である。

・私はある私立女子高校の家庭科を担任している者です。(中略) 聞くに耐えない暴言、乱暴など男の方だけの専用物のはずのものが、婦人代議士の間でも行われたのを聞いて、何ともいえぬ気持になりました。『ブラウスがこんなになってしもたやないか。自

由党のヤツら、片っぱしからたたきのめしタル』と髪をふりみだし、ズタズタのブラウスを指さしているあなたの写真を新聞でみたとき私は思わず口走ってしまいました。『まあ、恥さらしなことを…』／大石ヨシエ様／日本がデモクラシーとなり、男女同権の世の中になったとしても、男には男の、女には女の本能と分別があるのではございませんでしょうか。（中略）『女は女らしく』の日本古来の伝統に関心をお持ち下さいませ。（1954.9.9　多々良きょう　東京）

わざわざ関西弁のまま引用しているところから、「女らしくない」という非難は、発言の内容だけでなく、関西弁の使用にも向けられていると思われる。このとき、標準的な〈女ことば〉で抗議していればこれほどの非難は受けなかったかもしれない。関西弁を駆使する大石議員のことばづかいは評判が悪かったが、これは女だからということもあるだろう。

### 5．3．ていねいすぎることばづかい

女の「ていねいすぎる」ことばづかいに対して、「上品と教養をとりちがえている」「女性意識の過剰」「鼻もちならぬ」といった批判がなされることがある。これは50年代から70年代にあらわれ、80年代・90年代にはみられない。「ていねいすぎる」とされるようなことばづかいをする女が減ったのかもしれない。また、80年代・90年代は女子中高生の「粗暴なことば」や「ギャル語・コギャル語」に関心があつまっており、「ていねいすぎる」ことばづかいは注目されなくなったとも考えられる。もともとこの種の批判は、11件と少なく、「ていねいすぎる」ことばづかいについては、批判より規範を提示する文脈で述べられることが多い。なお、投書にはみられないのが特徴で、これは、一般の人々にはあまり問題として意識されないということかもしれない。批判の対象はほとんどがつぎのように中年女性である。

・私は粗雑な言葉もきらいだが度を越して馬鹿（ばか）ていねいな言葉使いもきらいである。実業家の奥さんなどに、よくていねいすぎる言葉を使うことで自分を美化しようとしているような人があるが、厚化粧の盛装をみるようで、さわやかなふんい気がない。（1959.3.18　円地文子　読売）

## 6．規範の提示

規範を提示する言説は、「女／男にはそれぞれに別々のふさわしいことばづかいがあり、

それにしたがうのが常識だ」ということを明示的に述べるものである。規範を提示する記事は、607件のうち135件あった。年代別の記事件数はつぎのとおりである[10)]。

50年代－22件、60年代－46件、70年代－37件、80年代－29件、90年代－2件

両性について規範を提示する記事は5件あるが、それらはすべて「男性には男性、女性には女性らしいことばづかいがある(1959.7.1　投書　毎日)」のように、それぞれが「女らしい／男らしい」ことばづかいをすべきだ、という規範の枠組みだけを示した抽象的な内容のものである。男だけに向けて男のことばの規範を提示するものはない。〈男ことば〉は男がつかうことを要請されていることばではないことからすれば、当然のことだろう。女に対しては、敬語やことばづかいのマナーを中心に「常識」が述べられている。〈女らしさ〉にとって従属性や他への配慮が重要な要素であることを考えれば、敬語やことばづかいのマナーが規範提示の中心となるのは、当然のことである。

内容としては、精神論もあれば、具体的に用いる言語形式や行動の教示もある。たとえば、つぎは精神論の典型である。

・私としては女性が当世風にどんなに活発になっても結構だと思います。ただ、そうした風俗生活の様式の中で女としての正しい敬語だけは使っていただきたい。(中略)女が女の言葉を話す限り、何を着ていようと、どんな生活をしていようと、女らしさというものを感じさせます。／ズボンをはいた女が男に向って「あんた」とか「それでさあ」などといったらもう終りだが、正しい敬語を話していれば、何を着ていようとしとやかに見えます。(1964.1.21　石原慎太郎　朝日)

具体的な規範の提示としては、新入社員、若い女性、新婚の女性、母親などそれぞれに向けて、ことこまかになされることが多い。たとえば、つぎのような見出しの記事がある。

≪新入社員に向けたもの≫

・職場の言葉づかい 敬語は判断よく やめたい＝おしゃべり、ダジャレ、甘ったれ、デレデレ 「とき」「ところ」の区別つけて B・G一年生への指針(1959.4.13　内部　産経)

・新ＢＧ読本６　言葉づかい　丁寧だけではダメ　テキパキしたやりとりを(1962.4.10　内部　讀売)

・職場　新入OLエチケット集　避けよう公私の混同　敬語の使い方に注意を(1973.3.29　内部　西日本)
・OL一年生のみだしなみ　早く卒業したい「学生言葉」　敬語に注意して(1980.3.30　内部　読売)

≪若い女性向け≫

・貴女の敬語　豊かな身振り表情に新しい時代のコトバ　でたらめな「お」は大変困る(1956.7.18　内部　東京)
・女性のための「愛される話し方」三カ条　ムードを大切に　「悪い断定」は禁物です(1962.3.24　加藤広　中日)
・新美人の条件（上）　頭の回転が早い　顔よりも親しみやすさ　日本語を完全にしゃべる(1977.11.15　山崎清　日経)
・女性に求める　内面的美しさ　心の動き示す表情　声、話し方にもくふうを(1967.1.30　内部　読売)

≪新婚の女性向け≫

・しゅうとがいる目の前で―　夫を呼び捨てはおかしい(1970.11.2　古谷糸子　東京)
・ことばのマナー　自分の夫のこと　姑には夫の名まえにさんづけ…(1977.9.4野元菊雄)
・姑に対する夫の呼称　もめごとのタネにしないために(1978.5.30　伊吹一　東京)

敬語やことばづかいのマナーについてのこれらの記事は、なにをすべきでなにをすべきでないか、なにをすればどんなペナルティがあるか、また、メリットがあるかを具体的に示している。そして、ことばづかいは「練習すれば身につく」ものであり、「内面的美しさ」となり、さらに「あなたの魅力が増す」と説き、あわせて、「敬語の使い方でその人の教養の程度がわかる」「教養のある人は、女性語や敬語を使いこなす人とも言える」と述べる。こうした言説は具体的なだけに、規範にしたがったばあいとしたがわなかったばあいの利益・不利益を勘案しやすい。規範にしたがったほうが効率的だという判断をみちびきやすいだろう。

新聞メディアにおいておこなわれるこうした〈女ことば／男ことば〉規範の提示は、この規範を維持するうえで大きな役割を果たしているといえる。

## 7．規範に対する批判

「女らしいことば」=〈女ことば〉と「男らしいことば」=〈男ことば〉の存在を自明のこととし、「女らしさ／男らしさ」を強調する言説がくりかえされるなかで、607件中56件と数は少ないが、この規範に反発して異議をとなえたり、規範自体を批判したりする言説もある。年代別の記事件数はつぎのとおりである。

50年代－4件、60年代－5件、70年代－8件、80年代－19件、90年代－20件

4．1．でも触れたが、50年代・60年代は、〈女らしさ／男らしさ〉という概念自体を問題にするよりも、「女と男は対等に」という視点からの規範批判が基調である。「男性と同じことばを使いながら、そこにチャーミングな魅力を生み出す―それこそ女性の勝負どころではないでしょうか(1969.6.19　永井路子　産経)」と〈女らしさ〉への信頼はゆらがない。

しかし、80年代・90年代には、「ジェンダー」という語が記事に用いられるようになり、〈女ことば／男ことば〉規範自体の意味を問う記事が登場する。たとえば、つぎのようなフェミニズムの視点からの言説である。

- 〈女性〉論の現在２　ジェンダー　セックスと別の社会・文化的性　女言葉との相関関係(1985.7.2　内部（由里幸子記者）　朝日)
- 日本に来て　日本の女性解放まず言葉から(1985.7.24　投書　読売)

さらに、90年代の20件のうち7件は、「「らしさ」神話と決別」「男らしさ女らしさ　親や教師から見直す動き　言葉遣い、色の好み、並び順…」「ジェンダーフリー　「男らしさ」「女らしさ」から解放」といったような〈女らしさ／男らしさ〉を直接問う記事で、そのなかでことばの問題がとりあげられている。

こうした記事は、全体からみれば少数ではあるものの、〈女ことば／男ことば〉規範を維持・再生産する言説に対抗する言説があらわれつつあるということはたしかで、注目すべきものである。また、規範を批判する記事の特徴は、書き手の性にある。投書や署名記事など性別がわかる書き手34名のうち、28名が女であった。女の書き手が多いのは、女に抑圧的なこの規範の性格によるものだといえる。

なお、66年と84年に、まったく同じ問題を論じた投書があった。夫に対する妻の敬語使用についてのものである。

・小説を読んでもテレビドラマを見ても、考えさせられるのは、日本の夫婦間の言葉です。若い夫や妻が、お互いに名前を呼び合っているのなどはほほえましいし、恋愛結婚の夫婦の自然なやりとりだとうなずけるのですが、主従を思わせるような言葉が使われている家庭が、中年以上の家庭に多いようです。「あなた、これ召上がります？」というのが妻の言葉とすれば「お前、これ食べるか？」というのが夫の言葉のようです。「あなた、これ食べる？」「君、これ食べる？」くらいにしてはいかがでしょう。(1966.1.22　投書　朝日)

・日本語には独特の敬語表現があり、それ自体はとても美しいもので、相手を尊重する気持ちをこめた言葉遣いは、コミュニケーションに不可欠だと、私も考えています。しかし、わが国の敬語が、人間相互のやさしい思いやりよりも、むしろ封建的な身分序列とともに発達し、家族制度のもとで、女性から男性に対してのみ、敬語が教育された歴史を考える時、今も多くの家庭で、女性の方が敬語を使わねばならないことに、私は、抵抗を感じるのです。男女平等な近代的家庭を築いてゆくためには、夫から妻に対しても、丁寧な言葉を心がけるべきだと思います。(1984.11.22　投書　毎日)

20年近くの時を経ても、同じ問題意識をもって同じ問題が提起されている。80年代にこうした家庭が筆者のいうほど多くみられたかどうかは別として、ジェンダーの力関係が女と男の言語使用を異なったものにしている状況はその後現在も変化していないことに注意すべきである。

## 8．おわりに

戦後50年間の〈女ことば／男ことば〉規範にかかわる記事の言説を通覧することにより、この規範にかかわる言説の特徴や言説内容の変化をみた。新聞というメディアの大きさを考えると、ここでとりあげた記事件数の607件はあまりに少ない。しかし、それぞれが新聞で実際におこなわれていた言説であることはたしかである。全体像を描くには心もとなくとも、重要なポイントは指摘できると思う。それは、新聞というメディアにおいて、

1）〈女ことば／男ことば〉規範にもとづく女のことばづかいに対する非難

2）〈女ことば／男ことば〉規範の擁護

3）〈女ことば／男ことば〉規範の内容提示

という言説実践が広範におこなわれており、それによってこの規範が維持され再生産されているということである。そして、これに対抗して規範に異議申し立てする言説も近年はみられるようになったことも指摘できる。

【注】

1）記事収集の対象となる新聞は、1989年5月以降は「朝日・読売・毎日」の3紙（東京本社版）に限定されたが、それ以前は他の全国紙や地方紙や専門紙からも記事が収集されている。「国研ＤＢ」の概要・性格については、井上・辻野（1992）、井上・池田・辻野（1994）、池田・辻野（2003）を参照のこと。

2）データ655件の掲載紙とその件数は以下のとおりである。
朝日新聞135件、読売（讀賣）新聞122件、毎日新聞112件、産経（サンケイ）新聞80件、東京新聞75件、日経新聞39件、北海道新聞34件、西日本新聞30件、その他（13紙）28件

3）ただし、ここでいう〈変化〉とは記事の言説において〈変化〉としてとらえられているもので、あとでとりあげる女の「ボク」使用のように実際には言語変化とはいえないものも含む。

4）田中（1983）は、「今日行われているような、東京語を基調とした、いわゆる標準語は、その普及は別として、ことばのかたちとしては、明治三十年代には、ほぼ完成の域に達していたとみることができる」と述べる。

5）佐竹（1998）は、関西の大学生の調査から、学生たちのほとんどが「日本語には〈女ことば〉と〈男ことば〉がある」と考えていること、また、その際にイメージされているのは〈共通語〉であって自分の実際つかっている方言ではないことを指摘している。

6）古くは、明治期から指摘がある。たとえば、『女学雑誌』221号（1890.7.12）は、「近来は大分女生の方々が御使ひなさる言葉のうちに暴々しひ、また丁寧でない、一種特別な聞き付けない、嫌な言葉が大分に這入て来たようです」としていくつかの例をあげるが、そのなかに「君」「僕」がある。

7）１件は、つぎのような非難される当事者である女子中学生からの反撃の投書である。「女子が君呼ばわりするということが悪ければ男子が女生徒を呼びすてにすることこそ失礼にあたります。（中略）それは封建社会の名残りで男尊女卑がソコを流れているからだと思います。（1957.1013　投書　毎日）」こうした意識が当時の女生徒にどの程度一般的なものであったかはわからないが、新聞に投書するという行動を起こす少女がいたことは注目できる。

8）ジェンダーフリー教育バッシングを展開している産経新聞は「最近、そうした行き過ぎ（筆者注：ジェンダーフリー教育）にも少しずつ歯止めがかかりつつある。新潟県白根市の小学校でクラスの名簿を男女別にしない「男女混合名簿」がこの四月から廃止された。三月までは男女児童とも「さん」付けで呼んでいたが、男子を「君」、女子を「さん」付けで呼ぶ以前のやり方に戻した。男女混合名簿の背景にジェンダーフリー思想があるとして廃止を決めた校長の判断を評価したい。」（2003.7.4）と述べる。性別を常に明示することはジェンダー秩序の維持にとって非常に重要である。したがって、いまや「女ーサン／男ークン」という呼びわけは守

るべきジェンダー規範となっているのである。

9）鷲(1999)には、菊澤季生の女房詞の研究を敷衍して日本の婦人語の伝統と優美さを説く吉田澄夫、保科孝一、石黒修などの言説が紹介されている。

10）規範提示の記事が80年代・90年代に少ない理由は不明。記事の収集方針がかわったためかもしれない。

【参考文献】

池田理恵子・辻野都喜江（2003）「「国語研究所新聞記事見出しデータベース」について」『国語学会2003年度春季大会予稿集』

井上優・辻野都喜江（1992）「国語関係新聞記事データベース」について（中間報告）」『国立国語研究所報告104 研究報告集13』

井上優・池田理恵子・辻野都喜江（1994）「国語研究所所蔵新聞記事を利用した研究について（覚え書）」『国立国語研究所報告107 研究報告集15』

尾崎喜光（1999）「女性語の寿命」『日本語学』18-10　明治書院

小林美恵子（1997）「自称・対称は中性化するか」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房

佐竹久仁子（1998）「「女ことば／男ことば」規範をめぐって」『ことば』19号　現代日本語研究会

田中章夫（1983）『東京語―その成立と展開―』明治書院

保科孝一（1936）『國語と日本精神』實業之日本社

三尾砂（1942）『話言葉の文法（言葉遣篇）』帝國教育會出版部

鷲留美（1999）「「標準女性語」の概念形成過程―昭和初期から終戦まで」『国語学会平成一一年度秋季大会要旨集』

≪謝辞≫本稿をなすにあたって、国立国語研究所の辻野都喜江氏から有益な助言をいただいた。記して感謝申しあげる。

（博士後期課程学生）

（2004年9月3日受付）
（2004年9月20日掲載決定）